

身体性の再発見

AI時代における体育の存在論的意義：
なぜ今、私たちは身体を動かすのか

環太平洋大学 友添 秀則

求められる体育と社会：西南戦争に見る身体

西南戦争



近代日本の体育は「社会の要請」から誕生しました。

🚩 1877年 西南戦争：銃器の操作不全という課題

🚶 「なんば歩き」から隊列行進への身体的変容

🏭 労働・戦闘・生産に適した身体形成の急務

🛡️ 近代国家の基盤としての身体づくり

なんば歩き



図1

スナイドル銃 イギリス製 銃身1250mm3,800g (未装填)



体操伝習所カリキュラム（明治17年）

課程	科目	具体的な内容	週時間数
正課 (体操術)	軽運動	整頓法、矯正法、徒手体操、亜鈴（アレイ）体操、球竿体操、棍棒体操、木環体操、豆囊（とうのう）体操	9時間以上
	兵式体操	基本体操（柔軟体操・器械体操）、操練、生兵学、整列小隊教練、解説演習、号令、調声	3時間
正課 (学理)	体育論	体性遺伝論、体操の価値・効能、学校衛生論など	3時間
	生理学	骨論、筋論、消化器論、血液循環器論、分泌器論、神経論など	6時間
正課外	重運動	斜梯（しゃてい）、平秤、木馬、滑板、平行棒、跳躍板など	(正課外)
	戸外運動	投環、盾環球、ベースボール、トロッコ	
	操槍術	竿船操操、競争演習	

近代学校体育の黎明と国家要請

🛡️ **明治時代：兵式体操と集団規律** 「学制」発布以降、富国強兵を目的に命令と服従を重んじる兵式体操を導入する。集団的な身体鍛錬が重視。

🍃 **大正時代：自由主義と「遊戯」の奨励** スウェーデン体操が導入され、子どもの自発的な遊びやスポーツが教育の中に取り入れられた時期。

🇯🇵 **戦時下：国民学校と軍事化の完成** 国民学校令により体育は「体錬科」へ。軍事教練化が進み、強靱な心身の育成が国家目的に直結。

明治・大正期の兵式体操と普通体操（集団行動）の様子



兵式体操



普通体操（集団秩序体操）

1947年～：新体育・生活体育

戦後の民主化を受け「スポーツ」が教材の中心に。子どもたちの生活に基づいた自発的な活動を促す「新体育」が提唱された。



戦後体育授業の変遷



1958年～：系統的・体力重視

基礎的な運動能力の不足が指摘され、技術の系統的な指導と、運動能力・体力の向上が改めて教育目標に強く掲げられた。



1977年～：楽しい体育の追求

運動の楽しさを味わわせることを主眼に置いた「楽しい体育」が普及。生涯スポーツへの関心を育む土壌が形成された。

※1964年東京五輪を契機とした、学校スポーツ設備の整備や全国的な種目普及も大きな影響を与えた。

現代の体育：生涯スポーツと知の融合



資質・能力の三つの柱

単なる技能習得だけでなく、「知識・技能」「思考・判断・表現」「学びに向かう力・人間性」を一体として育成することが目指される。



ICTによる客観的分析

動画での動きのチェックやタブレット活用により、自分の課題を客観的に把握。論理的に運動を理解し、改善する力が求められる。



生涯スポーツの実現

卒業後も生涯にわたって豊かなスポーツライフを継続できるよう、運動の楽しさとその価値を深く理解させる「ウェルビーイング」の視点が重要。

まとめ： 体育授業は「国家の要請に応える鍛錬」から「個人の豊かな人生を支えるリテラシー教育」へと、その本質を変化させてきた。

文明の危機：デジタル化 と「身体の不在」

現代はAIとアルゴリズムが認知活動を代替・最適化する時代

情報空間への没入が深まるほど、私たちは「生身の身体」
による世界とのつながりを失いつつある

今、体育が向き合うべきは、リアリティの希薄化という文明的
危機です。

身体的叡智：主体の根源としての身体



「身体は世界を感じ取り、意味づける主体の根源である」

— モーリス・メルロ＝ポンティ（現象学者）

汗をかき、他者と触れ合い、重力に抗う。

AIが肩代わりできないこの経験の中に、人間固有の叡智がある。

| 体育の再定義：身体的叡智を育む場



自己の制御

自らの身体を思い通りに動かして、不確実な空間で自己を制御する力。



即興的最適解

予測不可能な動きの中で、瞬時に身体的な判断を下す能力。



人間固有の学び

AIが到達できない「身体を通じた学び」の本質を追求する場。

非認知能力：不確実性に耐える力

AIの予測可能性

AIは計算可能で予測可能なモデルを好む。すべてが「最適化」された空間では、レジリエンスは育まらない。

運動の不確実性

思い通りにならない身体、予測不能な他者。この「不全感」を克服する過程で、未来を生き抜く基盤が築かれる。

自己理解とアイデンティティ



身体的対話を通じた自己形成

限界を知る：自分の身体がどこまで可能かを知る経験。

距離を測る：他者との物理的・心理的距離の把握。

痛みを共有する：仮想空間では得られない共感の基盤。

確かな「自己の身体的実在感」が、確かなアイデンティティをもたらす。

身体リテラシー：ウェルビーイングの舵取り

「能動的な市民」の育成へ！

1st

自己の根源を使いこなす

求められるのは競技力ではない。自らのウェルビーイングを身体的に舵取りできる能力。

AIに使われるのではなく、身体という自己の根源を使いこなし、能動的に世界に関わる力。

おわりに：現場へのメッセージ

デジタル社会における「リアリティのある生」の実現へ

体育教師は、単なる運動・スポーツの指導者ではありません。

サイバー空間とフィジカル空間との融合が更に進む中、
子供たちが生きた現実を実感できるようにする使命がある。

子供の「できた！」という喜びの裏にある、身体の躍動を
感じる感性を大切に。

AI時代、身体で考える力を育む体育を、共に創り続けましょう！